# 審 査 結 果 の 要 旨

| 報告番号 | （ 乙 ）第 2802 号 | 氏名 | 岡田 一貴 |
|---|---|---|---|
| 審査担当者 | 主 査 安陪等思 (印)<br>副主査 渕河悦代 (印)<br>副主査 齋方稔 (印) | | |

主論文題目：

切除可能食道癌に対する手術と化学放射線療法の比較

審査結果の要旨（意見）

久留米大学における食道癌の治療成績を手術療法と化学放射線療法とに分けて後方視的に解析した論文である．診療においての選択には常に医師と患者のコミュニケーションの上に成り立つ．容易に無作為抽出を行うことが出来ない状況であり，本研究の限界はそこにある．その中で根治的な治療結果が得られた場合に両者の５年生存率に差がなかったことは今後の方向性を示唆していると考えられる．患者の満足を得るために必要な治療を選択すべきであるが，そのためには正しく治療成績を評価すべきであり，本論文において得られた成績を元に新たな時代の治療法の開発に役立てていただきたい．

論文要旨

切除可能な胸部食道癌には手術が第１選択である．しかし，最近 Informed consent の後に根治的化学放射線療法(dCRT)を選択する場合も少なくない．当院での手術および dCRT の治療成績を比較し，切除可能食道癌に対する dCRT の妥当性を検討した．2003～2009 年に久留米大学病院で治療した切除可能 cT2/T3 胸部食道扁平上皮癌は 159 例で，進行度，リスク判定を告知し，患者が治療法を選択した．食道切除術が 122 例，dCRT が 37 例．背景因子は dCRT 群で高リスク症例が多かった($p<0.001$)．食道切除群では R0 が 95 例(78%)で，在院死を 2 例(1.6%)認めた．dCRT 群の完全奏効(CR)例は 19 例(51%)で，在院死を 1 例(2.7%)認めた．全症例の 5 生率は，食道切除群が dCRT 群より良好だった(50% vs 22%，$p<0.001$)．根治治療例(R0 と CR)の 5 生率は食道切除群と dCRT 群で差がなかった(56% vs 37%，$p=0.274$)．一方，姑息治療例(R1R2 と non-CR)の 5 生率は食道切除群が dCRT 群より良好だった(26% vs 6%，$p=0.013$)．多変量解析による検討では，臨床病期，治療方法，治療効果が独立した予後因子だった．根治治療例の割合および予後からみて，切除可能胸部食道扁平上皮癌には初回治療としては dCRT より手術が推奨される．